

〔類聚名義抄〕女二嫗一 依句反、オムナ、姥 莫補反、老母、媽正 娟加之反、女號、

〔東雅人倫〕人ヒト 略 老嫗をばオムナといひ 日本紀倭、オウナといひ 萬葉集、又オキメといひ ひ

り、顯宗紀に、置目は老嫗の名也と註せられたり、古事記には、賜名號置目と見ゆ、童男をヲクナといひ 童女をヲトメといひ、老翁をオキナといひ 老女をオキメといひ、日本紀に、老嫗の名と見えしは、稱呼の號を云ひし也、

〔倭訓栞〕前編四十五、おむな、日本紀に、老婆又老嫗をよめり、和名鈔に嫗と見えたり、おうなの轉

萬葉集靈異記に嫗をおうなとよめり、老女の義也、少女ををむなといふに混すべからず、新撰字

鏡に娘をおんなとよめるも同義成べし、和字にや、近江にては老嫗をおんばといへり、續日本紀

に、家原音那紀朝臣音那といふ婦人見ゆ、是も老女の意なるべし、

〔源氏物語〕藤袴三十一、このかみは、ことなるかたはにもあらぬを、人がらやいか、おはしましけん、おう

なとつけて、ころにもいれず、いかでそむきなんと思へり、

〔古事記〕故所追避而降出雲國之肥河上在鳥髮地、此時箸從其河流下、於是須佐之男命、以爲人有

其河上而尋覓上往者、老夫與老女二人在而、童女置中而泣、略

〔古事記傳〕九、老女は意美那と訓べし、新撰字鏡に娘於彌奈とあり、嫗は字書に見えず、字のさま

べ、續紀十三に、紀朝臣意美那と云婦人の名も見ゆ、抑老女を意美那と云は、少きを袁美那と云

と對て、大と小とを以て、老と少とを別てる稱なり、又伊那那岐、伊那那美などの、御名の例を思

は別てる稱、さて和名抄に、説文云、嫗老女之稱也、和名於無奈と見え、書紀に、老婆、老嫗、老女、續紀

十三なる紀朝臣意美那をも、同紀五には音那とあり、又家原音那と云も同卷に見ゆ、土佐、又万

日記におきなおむなと云るも、老夫老女の意なり、然るを註に翁なる女と云るは、誤なり、又万

葉に嫗靈異記に嫗於于那など見えたるは、中古よりして、美を音便に牟とも字とも云なせる

ものなり、これ又袁美那をも、後には袁牟那とも、袁宇那とも云と、同例なり、意と袁とを以て、老

父母を意知、意婆といひ、親の兄弟を袁知、袁婆と云たぐひなり、然るに、後世意袁の假字、亂てよ

り、是らすべて分れずなりにたり、又師賀茂眞淵は、萬葉に據ありとて、老女は於與那と訓べし、